



いつか「心に映ったまま」の写真を



首都大学東京 都市教養学部教授

平井洋子 (ひらい ようこ)

1984年、東京大学文学部社会心理学科卒業。(株)リクルート、(株)人事測定研究所に勤務のち東京大学大学院教育学研究科に入学し、1996年、博士課程満期退学。東京都立大学人文学部心理学科講師、助教授を経て、2009年より現職。

コンパクトカメラで記念写真を撮るだけだった写真が趣味に変わったのは、13年ほど前です。研究室の先生に誘われて尾瀬に行ったのですが、少しでも荷物を軽くしようと、小型軽量のAPSカメラをわざわざ買ったのです。ところがプリントしてみると、ピントが甘く、画質は粗くて平板で、あの彼方まで広がる雄大な風景が台無しでした。悔しくてカメラ店でそう話すと、「APSでは仕方ない」と。で、反動で、その場で一眼レフを買ってしまったわけです。すると今度は実に綺麗な仕上がりのです。色彩もキメも奥行き感も。以来、すっかり一眼レフにはまりました。

「絵画と違い、写真はある程度まで理屈と機材」と知人が言っていました。本質は光学機器なので、機材が光線を取り込む仕組みや癖を頭に入れ、自分の撮りたい画像を実現すべく、露出、絞り、シャッター速度、焦点距離などを決めていきます。被写体の配置や前後のボケさせ方についても、ある程度の写真文法があります。本格的

に取り組んでいるアマチュアの方々は、写真教室に通ったり撮影会に参加したりして勉強し、写真展に出品して腕と感性を磨いていらしゃいます。機材もハイエンドなカメラボディと何種類もの交換レンズ、頑丈な三脚などをお持ちです。

そうした世界があると知ること、私は違和感を覚えるようになりました。世の中には「作品」としての写真のほか、カタログ写真、報道写真、記念写真など、撮り方や目的の異なる写真がいろいろ存在します。私は何をどう撮りたいのか? 「作品」を迫りたいのか? まるで自分探しのようですが、たどりついた結論は、心に映った像をそのまま記録したい、ということでした。作品としての評価はともかく、自分のために、自分が興味を惹かれたものをその場の雰囲気ごと写し、残したいと。そう考えたら楽になりました。

どこかに足をのぼすときは、たいていカメラを持って行きます。そこがどんな場所だったか、街や道路はどんなようすだったか、道端にはどんな花が咲いていたか、

など、手持ちでパシャパシャと写していきます。花は良く撮るアイテムで、時間を見つけてはあちこちに出かけます。綺麗だと感じた姿を、綺麗なままに撮ってあげられれば最高です。

そうして撮っていると、人間の眼=視覚はなんて良くできているんだと思います。人間の眼は見たいものしか見ていませんが、写真にすると余計なものがいろいろ写っています。人間の眼は視野内の複数ポイントを瞬時に移動して並行的に処理していますが、写真では主題を一つに絞る必要があります。人間の眼は屋内も屋外も、昼間も夕方も違和感なく色彩を認識しますが、写真では露出やホワイトバランスを調整しないと不自然になります。写真が眼の網膜像だとするなら、人間の視覚は脳で情報処理を加えているし、「その場の雰囲気」には視覚以外の感覚も関与しているでしょうから、なかなか心に映った雰囲気通りには撮れません。でも、いつかそういう写真を撮れるようになりたいと思っています。



奥多摩 御岳山 レンゲシヨウマ



N.Y. グランドセントラル駅 夕刻